

Title	「作品ファースト」の観察力と直観であらゆる角度から美術作品を読み解く： 世界が認めるイタリア・ルネサンス美術史研究
Sub Title	
Author	平塚, 裕子(Hiratsuka, Yuko)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2024
Jtitle	新版 窮理図解 No.42 (2024. 11) ,p.2- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應理工の美術：アーティスティックな観察眼を培う 外国語・総合教育教室 荒木文果 (准教授) 研究紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000042-0002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「作品ファースト」の観察力と直観で あらゆる角度から美術作品を読み解く

世界が認めるイタリア・ルネサンス美術史研究

新しい価値観が生み出され、社会が大きく変革したルネサンス期の美術史は、伝統ある花形の分野であり、当のイタリアはもちろん、欧米にも膨大な先行研究がある。荒木さんがローマ第一大学に提出した博士論文をはじめとする研究成果は、新たな知見として高く評価されている。荒木さんが「作品ファースト」と表現するその研究方法について聞いた。

著書が高く評価され 「ダリア・ボルゲーゼ賞」を受賞

2022年2月、まだ新型コロナウイルス感染症が収まらないある朝のこと、眠気まなこで開いたメールボックスにイタリアから1通の知らせが届いていた。「……Award」。ジャンクメールの類いと思って危うく削除しかけたところ、「あなたの著作がダリア・ボルゲーゼ賞にノミネートされました。受賞した場合、5月にローマで開催される授賞式に参加でき

ますか」という文面だった。

1965年に始まったダリア・ボルゲーゼ賞は、ローマ研究に対する権威ある国際賞だ。きら星のごとき研究者たちが名を連ねるなか、荒木さんは若手で、かつアジア圏から初の受賞という快挙だった。

受賞の対象となった著書『Le cappelle Bufalini e Carafa』は、荒木さんのローマ第一大学における博士論文の内容を含め、それまでの研究成果をまとめて2019年にイタリアのカンピサーノ社から刊行されたものだ。いまだに誰が賞に推薦してくれたかは分からないが、本書が世界各国の著名な大学や研究所などに所蔵されていることも受賞への道へとつないでくれたようだ。

15世紀の礼拝堂壁画が語る真実

研究のためにローマをはじめイタリアじゅうの礼拝堂壁画を観に通ったという荒木さん。日常から一線を画した空間で壁画に向き合い続けていると、作品が語りかけてくるかのように感じられるという。前述の著書に収められている研究成果の一部の概略を紹介しよう。

【1】15世紀のシスティーナ 礼拝堂壁画装飾事業

ヴァチカンのシスティーナ礼拝堂といえば、16世紀に天才芸術家ミケランジェロが描いた《創世記》を中心とする天井画と祭壇壁画の《最後の審判》のある場所として、あまりにも有名である。

一方で、礼拝堂左右の側壁に、15世紀末に当時もっとも影響力をもった4名の画家たちによるフレスコ画《モーセ伝》と《キリスト伝》が残っていることはあまり知られていない。時の教皇がローマに招聘した画家のなかには、日本にも愛好家の多いボッティチェッリもいた。4名の親方たちはひとつの空間で共同制作するにあたり、描き方に関する様々な「取り決め」をし、各工房の弟子たちを率いて分担して仕上げた、というのが従来の見解だった。

これに対して荒木さんはまず、制作順序について、親方を中心とする同じメンバーが、各画面を順に仕上げていったとする定説ではなく、親方たちの《キリスト伝》と弟子たちの《モーセ伝》の制作が部分的に同時並行で進められていた可能性を提示。そのうえで、ボッティチェッリが担当した画面は、親方衆の一人、ペルジーノの様式に対するアンチテーゼとして、激しいポーズを取った人物像が躍動するダイナミックな画風を採用するなど、親方どうしの「取り決め」のなかでいかに画家の個性を出すかが課題であった点も指摘した。15世紀のシスティーナ礼拝堂壁画事業について、画家どうしの競合意識を画面上に読み取る試みはこれまでにほとんどなく、この点が大きく評価された。

【2】ブファリーニ礼拝堂壁画と カラファ礼拝堂壁画

これらはシスティーナ礼拝堂壁画装飾事業の直後にローマで制作され、ペルジーノの弟子ピントリッキオがブファリーニ礼拝堂壁画を、その後にボッティチェッリの弟子フィリッピーノがカラファ礼拝堂壁画を描いた。荒木さんは、



図1 ダリア・ボルゲーゼ賞授賞式
2022年5月、ボルゲーゼ宮殿（ローマ）にて、指導していただいた教授や友人の臨席のもと挙行了された。



図2 カラファ礼拝堂(左)の祭壇画《受胎告知》(下)

聖母マリア(画面中央)から注文主(赤いマントを着てひざまずく男性)が祝福を受けている様子が描かれている。荒木さんは、当時、カラファ礼拝堂があるミネルヴァ聖堂で育まれていた、受胎告知の聖母に対する特別な信仰体系を指摘し、その特異な図像について説明した。下の講義ビデオで詳しく解説している。



アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ「美術史を学ぶ」
<https://youtu.be/wDhgEuGxJpo?si=oy-D4besX8la7sfb->



図3 マーブリング作品

せんたく糊と水で作ったマーブリング液の水面に数色の絵の具を垂らし、絵の具が描くマーブル模様を紙に写し取る。絵の具の色や流し方はある程度選択できるが、どのような模様ができるかは楽しみだ。

両壁画がなぜかよく似ている点に疑問を持ち、2つの礼拝堂壁画を徹底的に比較して、フィリッピーノがブファリーニ礼拝堂壁画を全面的に参照してカラファ礼拝堂壁画を描いたことを指摘した。さらに、この視覚的な類似性の背景には、フランチェスコ会とドメニコ会という、当時のイタリアで勢力を二分していた托鉢修道会どうしの競合意識があったことも解明した。このような両礼拝堂の関係を指摘したのは荒木さんが初めてで、高い評価を得た。

作品が発する メッセージに耳を傾ける 「作品ファースト」の姿勢

荒木さんの研究は作品と向き合うことから始まる。研究の主役は作品であり、それが語っていることを大切に、できるだけ先入観を排除して観察し続ける。

そこから様式分析(どのように描かれているか)、図像学・図像解釈学的検討(作品の意味内容)、壁画の描かれた場所が有していたコンテクストの調査(当時の社会における存在意義)といった観点について、それぞれの作品に合った方法論を用いて考察を深めていく。そうすると、ルネサンス期の光り輝くような壁画

を、当時の人々がどのような思いで受け止めたのか、そのイメージが見えてくる。

カラファ礼拝堂の少し変わった受胎告知図(図2)については、注文主の葬儀の際、まさにこの礼拝堂で読まれた弔辞に、研究の核心となる情報を発見した。500年以上も前の個人的な情報を読み解いていく過程は、時空を超えて旅をするようであり、また「推理小説のようでわくわくします」。

美術史学には、古典的名著や定説とされる先行研究など膨大な積み重ねがあり、欧米の研究者にとっても新しい説を提唱するのは至難の業だ。荒木さんは既成概念に捉われずに、これまで盲点として見過ごされてきた部分に光を当て、次々に新たな事実を導き出してきた。「文化的背景が異なる日本人であることが、逆にメリットになっている部分もあるのでは……」と語る。

アーティスティックな 思考法を共有したい

美術作品は、それぞれに異なった光を放つ。荒木さんは、「作品の魅力を広める伝道者でありたい」と言う。近年では、原稿依頼や共同研究が増え、複数の研究テーマを抱えて大忙しだ。同時に、日本

での著書刊行の準備など、精力的に研究活動が続いている。また、「美術作品は裏切らない」と言う荒木さん。一生懸命問いかけると作品が必ず答えを出してくれるからだ。学生にも、人生の折々に美術作品が支えになるだろうことを伝える。

「作品の声に徹底的に耳を傾ける」研究姿勢をはじめ荒木さんの研究方法は、それ自体がアーティスティックな側面をもつ。そんな思考方法を、学生たちと共有したいと考えていたところ、「マーブリング(図3)」というアート技法を使うことを思いついた。マーブリングはやってみただけで面白く、大学生はもちろんのこと、子どもから大人まで誰もが楽しめる。ワークショップのような形態で、例えば「散歩」や「印象派」など、共通のテーマで制作すると、そのイメージを捉えて、形にしようとするアーティスティックな思考が働き出す。参加者どうして意見交換をすれば、イメージの広がり共有できる。

「私は参加者の思いを引き出すのが上手いと思うのです」と笑顔の荒木さん。美術作品を対象に鍛えた観察力で、参加者の心の声を聴き、個性や可能性を引き出そうとしているのかもしれない。

(取材・構成 平塚裕子)